【はじめに】
　仙台大学陸上競技部 OB/OG 会の会長を務めさせていただいております、
私、29 期生の大塚勇次と申します。専攻は投擲種目、槍投げです。
この場をお借りして、御挨拶をさせて頂きます。宜しくお願い致します。
　仙台大学陸上競技部が更に発展・活躍をするため、そして私達 OB/OG が卒業してからも交流できる機会を作っていくため、そして今後も、仙台大学に誇りを持ち続けるため、今回自らの素性を明かしながら、皆様の御理解をいただければ幸いです。

尚、この後の投稿に対しては、私自身のラフなコメントとして記述させていただきます。
御無礼な表現があるかと思いますが、これが私自身のコメントです。ご了承くださいませ。

【希望を失った高校初期】
大塚は埼玉県の出身。甲子園で古豪の埼玉県上尾高等学校出身。入学当時は公式野球部に入部するため受験。入学後、まさかのフェンスになれという監督からの通達。フェンスって？外野からボールが抜けた時、フェンスのようにクッションとなりフィールドに返す役目。これ部活なの？即翌日から部活動に入らない帰宅部となる。前髪を染め、体育教師にも目をつけられていたが、全然御構い無し。あっという間に一年が経過する。甲子園での活躍を夢見るどころか、高校野球もできないスクールライフのスタート。そんな大塚が・・・。

【出会い】
　高校二年の始業式に、体育準備室へ呼び出し。心当たりが不明であったが、仕方なしに足を運ぶ。そこで伝説の教師、秋元恵美先生と出会う。秋元先生は、アジアオリンピック女子 100mH のゴールドメダリスト、埼玉県のレガシーと言われている選手（先生）であった。貫禄はあった。オーラもあった。でも滅茶苦茶可愛い一面を要していた。魅力たっぷりの先生から竹のような長い竿を手渡され、これが「槍」。人より遠く投げる競技と教わる。試しに一投を投げる。クロスステップ？そんなステップは出来なくとも、とにかく投げた槍が遠くへ飛んだ。人生初の槍投げで 40m。直ぐに陸上競技部へ入部。地区大会へ出場することに。

【高校時代の成績 Part 1 】
高校二年からスタートした槍投げ。地区大会は難なくクリア。県大会で 6 番に入り、北関東大会へ出場。高校二年の成績はそこまで。1 年間は陸上競技という種目と向き合ういい経験をさせてもらった。
　秋元先生の交流関係が、無知だった大塚を奮い立たせた。冬期トレーニングに御指導を受けたのが、吉田雅美さん。当時槍投げの日本チャンピオン。体の大きさしか記憶にない。
また、韓国ナショナルチームの女子 100m選手と合宿もした経験がある。瞬発の速さと負け

ん気の強さが際立っていた印象。槍投げは、しっかり教わった記憶はないが、何となくやらなくてはいけない必須事項は、秋元先生が出会いのチャンスを与えていただき、その意味を察しながらトレーニングメニューを自分で作っていた。これがのちにいい結果に。

【余談話】

上尾高等学校にはプールが無く、トレーニング後のアイシングが出来なかった。唯一先生へ直訴したことが、「プールに行きたい！」ということ。高校二年の 12 月からスイミングスクールへ通わせてもらう。が今当たり前にあるフリークラスが無く、また大塚、泳げなかったため、基礎を学ぶ小学低学年と同じクラスへ。一人だけ身長が高く、御父兄の目線も気になる。日曜日にバッジテスト（進級テスト）で毎週ぶっちぎりのスクール新記録で合格。子供たちからは賞賛されていたが、御父兄の視線が強く、居づらくなりスクールから席を離れた。

【高校時代の成績 Part2】

さて、高校三年での成績は、埼玉県では優勝。北関東大会でも優勝。地元紙に記事掲載されるほど。ピークが来たかと思いきや・・・。インターハイ予選落ち。これは想像を超える絶望的は気持ちの落ち込みであり、試合後アイシングで富山湾に海水浴をしたが、コンタクトレンズ片方が海へ。落ちるときは落ちるなあと痛感。大きな敗因として、メンタルが弱かった。

実は埼玉県から 8 時間かけて、両親が富山県（インターハイ会場）まで来てくれた。今まで一度も応援に来たことが無い両親の前で、結果を出さなくては！その気持ちが、槍には届かず、ピントがあわなかったのだろう。メンタルという言葉が、のちの目標に代わっていくとは・・・。

【大学（進学）選び】

教師を目指していたとは言えないが、槍投げを続けたいという気持ちはあった。それ以上に好きなスポーツを続けたいという、わがままで、目的不純な願いを両親は投資してくれた。今、親の立場になって、自分の子供が同じ事を言ったらどうだろう。まず却下である。

当時選択肢として、高校の指定校推薦もあった。亜細亜・専修・城西・大東文化。
しかし、体育学科希望だったため、推薦として国士館・国際武道・鹿屋・そして仙台大学があった。入試日が一番早かったのが仙台大学。よくわからないまま願書を提出。

受験前に一度大学を見学しようと仙台へ。白石蔵王から在来線の白石で乗り換え、船岡へ。当時そのルートしか知らなく、新幹線を下車して、在来線が隣接していない事、また 1 時間に数本しか電車が来ない事、駅前が栄えていない事、そして扉は自分で開ける事。不安しかない初仙台大学訪問への軌跡であった。

大学はというと・・・県内で伊奈学園総合高校という学校が上尾高等学校の近くにあった。

その高校より小さいという印象。そして陸上競技部のトラックの脇に、自衛隊があることに驚く。本当にいいのか不安のまま、帰路は仙台駅から埼玉県へ戻る。決めた事だからと言い聞かせ、両親へ再度受験する決心を伝えた。

【大学受験＝セレクション？】

推薦入試で受験をし、当日実技試験、今でいうセレクションを受けた。当時は陸上競技部全体で 100 人はいた気もするが、槍投げは 10 名程度。愛媛県の国体代表選手と一騎打ちであったが、60m スローを投げ一位通過。感触的には、合格を確信。この後、合否判定が届き、仙台大学、そして陸上競技部の一員となる許可を得た。

【誓い＝有言実行】

入学した数日後、藤井先生に投擲一年全員が呼び出され、簡単なヒヤリングをする。今でも覚えている質問が、「目標は何？」という質問。高校時代に出来ると考えていた全国ベスト 8 入賞、「全日本インカレでベスト 8 入賞をします。」と即答。その後の質問は無かった。

体格的に他の選手よりスマートで、同年代はほぼ東北出身選手。言葉、環境、思考、全てが違う状況ではあったが、やるべきことは一つ。まず目先の東北インカレ、仙台大学代表選手になる事。それしかなかった。

【デビュー戦】

学内東北インカレ代表選考会を無事 3 位通過し、忘れもしない宮城県女川陸上競技場が公式戦の場所であった。海近くの旅館で宿泊をし、コンディション調整と言いたいところだが、1 年生という立場もあり、上級生との時間を共有することが命ぜられた。夕食後、買い出し、夜釣りに突き合わされ、しまいには大会に出場しない先輩のマッサージ。退出許可が出たのが深夜を超えていた。今になってはいい思い出であったが、内心ぐちゃぐちゃな憤りを持ちながら試合に挑んでいたことは覚えている。

はじめて着た仙台大学陸上競技部のユニフォーム。黒色で大学ロゴが胸中心にある。左胸にはチャンピオンのマーク。シンプルだけど高揚する自分がいたことは間違いない。

さて勝負は後半と決めて、試技に入る。2 本目でベスト 8 確定になり、後半の準備。狙いは 5 投目と決め、再度準備を始める。そして・・・。63m を投げベスト記録で優勝。大会記録にもなり、その時の大会で MVP 選手に選ばれ、華やかはデビュー戦となる。

その時の全体・投擲主将であった及川先輩から一言。「仙台大学陸上競技部を背負って行けよ」と言われた。後にこだわりを強く持てた一言になった。

優勝の知らせをいち早く両親へ。携帯が無い時代だったため、帰宅してから直ぐ固定電話より報告。父、母ともあまりピンと来ていないようで。「体だけは気をつけなよ。」と言われた。

【東北インカレへのこだわり】

東北インカレはシーズン開幕でもある大事な公式戦ではあった、東北地区の大学対抗戦でもある。高校時代は意識していなかった経験ではあるが、陸上競技が個人種目ではなく、団体競技という事を学んだ。そして、こだわりとして、東北インカレは絶対出場し、絶対優勝する大会だと位置づけた。有言実行となり、無事４連覇を達成。その反面・・・。

こだわりが強すぎ、せっかく大学代表となった選手が棄権、またふがいない試合（途中であきらめる行為）をした時、後輩は勿論であったが、先輩にも罵声を飛ばしていた。その行為は反省しないといけないが、東北インカレだけは本気で熱くなっていた大会であった。

【ライバル・仲間】

同学年で空気感が似ていたのが、跳躍ブロックの石川明博。のちに悪友（笑）とも言われたが全国大会出場にベクトルがあっていた選手であった。トレーニングの取り組みと私生活のメリハリは共感できた。御互いファッションに興味が強く、当時のファッション雑誌（ファインボーイ）に掲載されたこともあった。

投擲ブロックではみな仲間であったが、砲丸種目の櫻庭知基、清水智之は強烈だった。体格は大塚の２倍はあった。とにかく運動能力が見かけによらず素晴らしい。知基はパワー、智之は繊細さをもっていて、二人から学ぶことが多かった。またよくお米をいただき、大塚の米処でもあり、食事でも非常に助けられた。この二人も一緒に全日本インカレに出場した。

選手として全国を見据える事を教えてくれた方。花沢 元先輩がいる。東北福祉大学を終えて編入で仙台大学へ。学年は一つ上になるが、大先輩であった。全国を知る貴重な選手であり、宮城県を代表するスターでもあった。直接アドバイスやトレーニングをしたことは無いが、存在感から学ぶことが多かった。

最後に（笑）やはり加藤（旧姓）おり絵の存在は大きい。知り合ったのは１年生の冬であった。彼女自身もハードルの選手としてインターハイに出場していた実績のある選手であった。怪我に悩まされ、思い通りの選手生活はいかなかったと思えるが、彼女の分まで競技・成績・結果を出していこうと決めていた事は間違いない。とにかくわがまま・自己中・問題児な大塚をコントロールし、サポート役に徹してくれたのは彼女である。ありがとう。

【全国デビュー】

さて、１年のシーズンを終え、冬期トレーニングを計画通りに終え、２年生の夏、ナショナルスタジアム＝国立競技場で全日本インカレデビューを果たす。結果・・・。あっさり予選落ち。一瞬で時間が過ぎ、放心状態でフィールドを後にした。でも、ゆっくりとフィールを顧みて、来年の誓い（勝負）を決めた。

そして更にトレーニングに明け暮れる日々に突入とともに、人から学ぶことを始めた。

それが、横川先生である。短距離ブロックの先生であった横川先生。口数少ない藤井先生とは違い、よく話しかけてくれた。そしてもう一人、鈴木省三先生。数値的な観点からアド

バイスを求めた。健康面からは本多先生。御母さんみたいな存在だったが、栄養面で教えを求めた。メンタルは横川先生、数値的不足している部分の指摘を鈴木先生。健康管理は本多先生。そして居るだけで安心した藤井先生の協力の基、新たな挑戦が本格始動をした。

【ジャージ＝ファッション】

今は当たり前になったが、当時の陸上選手が着用するウェアはダサいと感じていた。ランパンランシャツ、柄と強烈な色合いのジャージ。またジャージのパンツは裾が細いタイプが主流であった。

2 年生からウェアを変更。水泳部が着用していたアリーナというブランドをジャージに。そしてＴシャツは古着屋で購入。チビＴシャツを着用して練習をしていた。船岡には知る限り 2 件ほど古着屋があり、良く行っていた。古着屋の店主の影響で、20 歳の時一人でロサンゼルスに行き本場の古着を買い求めに行った経験もある。（この話は別の機会に。）

そして何より生意気だったのがサングラスをしながらトレーニングをしていた。サングラスといってもスポーツサングラスではなく、ビーチボーイズが流行っていた時代だったため、黒縁フレームに青色のグラスをいれてアイウェアとして着用。先輩方から小言を言われることもあったが、この大塚スタイルは貫き通した。水球部のメンバーからも小言を言われることがあったが、御構い無し。来るなら来い！のスタイルはいつしか結果で表現する事へと繋がった。

【そして全日本インカレ　1998】

競技者として最大のピーキングは 1998 年、大学 3 年生であった。順調な調整と入学当時と見違えるほどの体格変化（65kg から 77kg へ）、またスピード、跳躍力すべてが群を抜いて仕上がり、東北インカレから順調に仕上がっていた。全日本インカレ標準記録を A 標準で通過。いよいよ競技人生の集大成が来たと感じ、競技人生最初で最後、両親を国立競技場へ招待。いざ国立へ！意気揚々と東北新幹線で東京、そして国立への軌跡が幕を開けた。

昨年大敗をしたフィールドが幾分小さく見えたのは、一度経験をしていたからであろう。トライアルでもなかなか動きがよく、何か引っかかるかなって気分に。そして試技が始まる。勝負は前半しかない！入学当時の決めつけとして集中力を高めていた考えが自然と体を動かした。

渾身の一投目・・・。ライナーで 60m 先へ弾道のように突き刺さり大失敗。当時同じインカレに出場していた砲丸投げの後輩（1 年生女子＝後藤綾乃）からまさかの一言。それは・・・。

「大塚～～～まだまだ～～～」であった。後輩から苗字を呼びつけされた悔しさ半分、思わず笑みを浮かべてしまうほどの大声にリラックス半分であった。

試合が終わったら羽交い絞めにしてやろうと槍投げ以外の事を考えていた。また槍投げピットの対面に、女子走り高跳びが始まっており、日本記録に挑んでいる選手（今井？太

田？）がいた。スタンドはその試技に注目が集まっており、騒がし状況。そんな中、思いついたこと。この選手まで届かせよう。それと一投目の試技をみて補助員が前方に来ている姿を見て、驚かせてやろう。そう決めた第２投目！

投げた瞬間槍が消えスタンドから大歓声、そして応援席から歓喜の叫び声！「オオツカ！」また後輩からだった。でもその直後、70m88 ㎝と電光掲示板に表示された。

入学当時藤井先生へ誓った「全国ベスト８入賞」そして両親の前で「結果」最大にサポートしてくれた加藤おり絵への「感謝」が達成された瞬間でもあった。2 投目以降も試技は行ったが、この空間を楽しむ事で頭が真っ白。優勝は断然の強さと貫禄で植徹選手、準優勝に田村三喜雄選手。

そしてブロンズ（第三位）で大塚勇次が表彰台に立つことが出来た。

表彰式ではまさかのサプライズ。なんと藤井先生がプレゼンター。競技人生として最高潮の時間でもあり、恩師への恩返し？もなったと自画自賛。忘れる事のない時間が国立で達成できた。

【最高学年（4 年生）として】

大学全体（陸上競技部）を引率していく立場として、大事なのが「歩み寄り」だと考えていた。今まで結果に対してまっしぐらに猛進していた時代から、後輩への配慮を心掛けた。自分が経験したことで理不尽だったことは極力排除。個人の考えをまず尊重。そして、自主自立を促す。このことに重点を置いて残りの学生生活・競技人生を謳歌した。

後輩と個人的練習をしたり、練習後ゲームをしたり、飲んだり、とにかくハチャメチャであったが、大塚的には一番楽しんだ時間でもあった。のちに主将となる伊東良太、また乾智之との数々の思い出が強い。彼らはどうであったのか。

【後輩たちへ】

こんな大塚は、ただ闇雲に槍投げに没頭していたのではない。やはり「時間」を意識して覚悟を決め、突き進む。単純であるけど結構難しい事を、当たり前のようにやり抜く。

後は引き際を決める事も大事。こういうコメントは夢が無いと思うが、陸上競技を続けて生活が順風満帆にいくのはほぼ一握り。特に選手としては。だから陸上競技、そして仲間から多くを学び、その学びを基礎として人生を謳歌する方がいいと思う。だから引き際は大事。

因みに大塚は 30 歳の宮城県選手権で槍をグランディ 21 のピットに置いてきた。理由は、同大学の選手に負けたから。記録は 63m で 3 位だったような。始めと終わりが 63m。これも何かの縁かな。息子（泰雅：1 歳）を表彰台に乗せようとしたら、先生に止められたのが心残りだけど。

【先輩たちへ】

大塚を知っている人、知らなかった人、多くいらっしゃると思います。藤井邦夫先生時代で過ごした大塚より上の先輩方へ。今現役仙台大学陸上競技部で一生懸命、切磋琢磨して目標に向けて歩んでいる後輩も我々OB/OG も「仙台大学陸上競技部」に相違はありません。

これからも胸を張って仙台大学陸上競技部と言える環境を、我々で構築していくため、一人一人の歩み寄りが何より大切だと考えております。生意気にも大塚が昨年度、花沢先輩から継承して OB/OG 会会長になった。タイミングとして、2022 が非常に大事な瞬間だと感じている。御理解は勿論、御指導、ご鞭撻を頂戴しながらより良い組織になれば幸いです。

【最後に】

皆様に御願いとして、重ね重ね御伝えさせてください。

大塚の考えは、ＳＤＧｓで掲げている目標４と目標１７を目標にしていく事。

仙台大学陸上競技部卒業生には、学生時代に全国・世界レベルで結果を出し、また社会人になってから組織の代表として活躍している仲間が多数存在する。その方々のマインド共有をすることにより、在学生の道標に役立ってほしい考えがある。

そして、仙台大学陸上競技部への支援と新たに女子駅伝（ブロック）が発足に伴い、競技活動を継続して支援をする。杜の都仙台での選手達の疾走が、プラスαで我々の希望となり、選手達へ躍進そして将来に期待したい。

最後に情報管理についてですが、先程述べた在学生への競技以外での支援として、多くの有識者、有権者からの講演会を考えている。差し支えない情報提供をいただき、
企画のオファーができる環境にしていきたい。

最後に、仙台大学陸上競技部ＯＢ／ＯＧ会会長の大役を任されたからには、「会の持続的成長と選手の課題解決に貢献する」とし、関係各位、皆様の声に、耳を傾け意志をもって取り組んで参ります。

長々長文で失礼致しました。大塚という人物を少しでも知っていただければ幸いです。

仙台大学陸上競技部ＯＢ／ＯＧ会
会長　大塚　勇次

2022 年 10 月吉日